

社団法人日本超音波医学会第 83 回学術集会を終えて

会長 工藤 正俊
(近畿大学 消化器内科学教授)

本学会の第 83 回学術集会 (写真 1) を 2010 年 5 月 29 日から 31 日の 3 日間、国立京都国際会館で開催致しました。おかげさまで 3,426 名の参加者を得て盛会裏に終えることができました。御協力頂きました関係の先生方、皆様には御礼を申し上げます。本稿では開催準備から終了までの印象を振り返ってみたいと思います。

1. テーマ

第 83 回のメインテーマは「サイエンス・テクノロジーのイノベーションからアートへ」と致しました。サイエンス、あるいはテクノロジーのイノベーションから実地臨床へ還元することは今や、超音波の進歩にとっては切っても切り離せないものになっております。最近の 3D や 4D あるいは超音波造影剤の進歩などはその最たるものであり、現在でも超音波造影剤の開発などは臨床そのものにつながっております。また、逆に臨床的なニーズ (State-of-the-Art Practice) から工学系、あるいは企業への働きかけによって実現した技術 (Technology) や Innovation も存在致します。そのような意味でメインテーマに加えてサブテーマとして “From the State-of-the Art Technology to Future Ultrasound Imaging, From the State-of-the-Art Ultrasound Practice to Future Technology” とさせて頂きました。

このサブテーマは日本語にすると陳腐ではありますが、最先端のテクノロジーの進歩が将来の超音波診療の現場へと確実に反映されるべきで、さらには最先端の診療の現場にいるもののニーズから新しい将来のテクノロジーへのシーズが生まれるという意味であります。超音波医学会は「医」と「工」の両輪がうまく連携することが大変に重要であります。その意味で最先端の超音波臨床をやっている医師、及び技師こそが超音波技術の開発を正しい方向へと導き innovation へもつなげていく役割を担っているものと信じます。もちろん逆もまた真実で最先端の工学・基礎研究を極めることが超音波臨床のニーズに答えることができると考えております。



写真 1



写真 2 左から Prof. Byung Ihn Choi, Prof. Giovanni Cerri, 岡井崇前理事長, Prof. Michel Claudon, 工藤正俊先生, 渡邊決先生, Prof. David Evans, Prof. Seung Hyup Kim

2. プログラムについて

プログラムについては実行委員の先生方に適宜メール会議をはさみながら数回お集まり頂き、決定致しました。この先生方には本当にお世話になりました。この場をお借りしましてもう一度感謝申し上げます。各領域からシンポジウムは 12 セッション、パネルディスカッションを 13 セッション、ワークショップを 7 セッションご用意致しました。特別企画として「診断基準を巡る諸問題」ということで「1. 血管エコー」、「2. 肝腫瘍」、「3. 胎児異常超音波スクリーニング」、「4. 結節性甲状腺腫」の四つを取り上げました。また、今回は日本超音波医学会の国



写真3 Prof. Byung Ihn Choi



写真5 展示会場

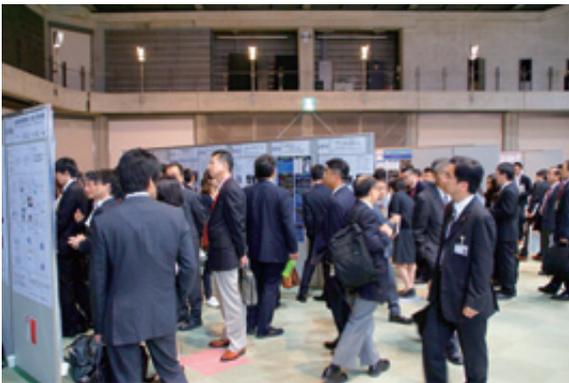


写真4 ポスターセッション



写真6 展示会場

際化ということも視野に入れて、世界超音波医学会 (WFUMB), アジア超音波医学会 (AFSUMB) のメンバーの方も Key note lecture としてお呼び致しました (写真2)。従いまして10の Key note lecture を用意致しました。また、WFUM-AFSUMB-JSUM Joint SessionでWFUMBのPresidentである Michel Claudon 教授, AFSUMBの Immediate-past President の Byung Ihn Choi 教授 (写真3), 及び JSUM の岡井理事長のお話を頂きました。Key note lecture では WFUMB, AFSUMB のそれぞれの Council Board member の方々にそれぞれの領域で貴重なお話を頂くことができました (写真2, 3)。特別講演と致しましては循環器の領域より、吉川純一先生、及び消化器領域より幕内雅敏先生に特別講演を頂くことができました。もちろんポスターセッションも充実していました (写真4)。

3. 開催前に苦勞したこと

前の椎名先生の第82回においても述べられていることではありますが、一昨年のいわゆるリーマンショックによる急速な景気の落ち込みがあり、本年

の開催前の4、5ヵ月前になってもランチョンセミナーや展示などが本格的に埋まらない状態でありました。これについては私も大変に苦勞し、教室の財務担当者だけでなく、私自ら多くの装置メーカー、医薬品メーカーの方々に直接電話でお願いし、何とか、ランチョンセミナーや展示などもほぼ目途が立ち、ほっとしたことを今でも鮮明に覚えています。この度のことで予想以上に装置メーカーにとっての不況の波は強いものであることを実感した次第であります。

しかしながら、その中でも御協力頂いた各社のメーカーの方々に大変感謝を申し上げる次第です。このご恩は一生忘れませんので今回ご協力頂いたメーカーの方も私に貸しがあると頂いて結構です(?)。おかげさまで本学会の名物となっている展示 (写真5, 6)、イノベティブテクノロジー、バーチャルライブも大変盛況でありましたことを付け加えさせていただきます。

4. 国立京都国際会館について

会場については私の職場は近畿大学で大阪にあり



写真7 国立京都国際会館



写真9 吉川純一先生（特別講演演者）



写真8 宝ヶ池から見た会場



写真10 幕内雅敏先生（特別講演演者）

ますが、学生時代は京都で過ごしたこと、また5月という新緑の季節が京都は最も過ごしやすいということから京都に決定致しました。結果的に京都を会場に選んだことは多くの会員の方々にも好評でありました（写真7, 8）。また、それまで1週間以上降り続いた雨も会期中の3日間については快晴で、これも皆様方のお陰と感謝致しております。季節としては最高で新緑も美しく、湿度も高くなく、暖かくもなく、寒くもないという絶好のタイミングでの開催となりましたことは大変喜ばしいことと考えております。また、2日目の Fire side talk においても屋外でのパーティーも行うことができ、心配していた雨による影響も避けることができました。

5. 特別企画の工夫

特別企画としては今回、これまでの会と差別化を意識したのはやはり WFUMB, AFSUMB のメンバーを招いた WFUMB-AFSUMB-JSUM Joint Session, 及び WFUMB, AFSUMB のメンバーによる Key note lecture, そして横断領域として「1. 専門医・Sonographer 養成のための教育システムを考える」

というセッション、ならびに「2. CT, MRI 時代における超音波検査の在り方」、「3. 用語の誤用」、「4. マイクロバブルの基礎と臨床をめぐって」、という四つのセッションを設けたことであります。これらのセッションも大変好評で多くの医師、技師の先生方にご参加を頂きました。

6. 特別講演について

今回の学会の特別講演では私のひよっこの頃から叱咤激励をして頂き、常にご指導頂きました循環器と消化器の2大巨頭をお願いいたしました。お一人は神戸中市立中央市民病院で18年間ご指導頂きました吉川純一先生（写真9）、ならびに肝臓内科医として本当にかげだしの頃から肝臓癌の手術見学、あるいは学問が何たるものかを教えて頂き、英文論文執筆のいろはから薫陶を頂いた幕内雅敏先生をお願い致しました（写真10）。これらのお二人の先生は私が超音波に関わる機会を作って頂いた私が師と仰ぐ先生方です。このお二人の講演を拝聴致しまして改めてお二人の偉大さに感じ入った次第であります。



写真 11 ファイアーサイドトーク

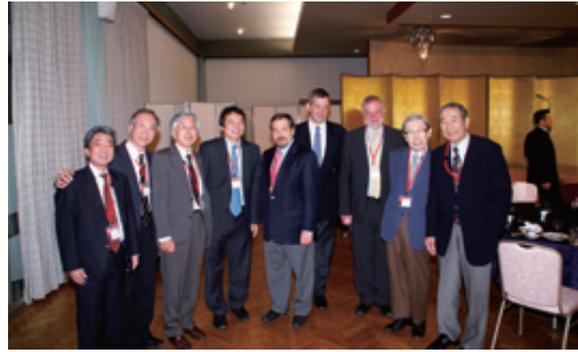


写真 14 WFUMB, AFSUMB, JSUM のメンバー



写真 12 屋外でのファイアーサイドトーク



写真 15 今回の学会のシンボルデザインの由来について解説する筆者



写真 13 夕刻のファイアーサイドトーク

7. ファイヤーサイドトーク

ファイヤーサイドトークも 500 名以上の参加を得て、盛会に行うことができました (写真 11-13)。特に、宝ヶ池を望む屋外を開放できたことは天候にも恵まれ、大変好評でありました。また、WFUMB、AFSUMB のメンバーも会員数 13,000 にも及ぶ日本超音波医学会の実力、ならびに一回の学術集会で 3,400 名を越える参加者があるということにも大変な感銘を受けたようです (写真 14)。その意味でも日本、アジア、及び世界における日本超音波医学会の底力を WFUMB、AFSUMB のメンバーにも印象付けることができたのも本学会の成功の一つである

と考えております。

8. エッセイ集発行について

本学会の特別企画といたしまして「私と超音波」というエッセイ集を企画致しました (写真 15)。これはこれまでに同様の企画がなかったこと、及び日本超音波医学会は多岐にわたる専門の先生方で構成されており、「医」と「工」、及び「医」の中でも循環器内科、消化器内科、産婦人科、泌尿器科を始め、多くの専門の先生方がおられるため、大変著名な先生方がどのように超音波に携わってこられたのか、あるいはどのようなスタンスで超音波と接してこられたのか、過去にどのような業績があるのかといったことが、あまり超音波医学会以外では接することがないため、「ピン」とこない方もおられるのではないかと思います。従いまして、この度は全てのこれまでの功労会員、名誉会員、及び理事経験者、学会長経験者、及び現在の代議員全ての方にエッセイの執筆をお願いし、多くの方々から快諾のお返事を頂き、1冊の本にまとめることができました。この本は大変好評で、一つの日本超音波医学会のマイルス



写真 16 Prof. Cheng-Wen Chiang



写真 18 Prof. Michel Claudon



写真 17 Prof. Michel Claudon



写真 19 第 83 回学術集會會長挨拶

トーンともなるべき記念誌になると考えております。現在、まだ在庫に多少の余裕はありますのでぜひとも欲しいという方は無料でお送り致したいと思っておりますのでご連絡頂ければ幸いに存じます。

9. WFUMB, AFSUMB と日本超音波医学会

私は現在、日本超音波医学会理事会の御推挙を受け、アジア超音波医学会 (Asian Federation of Society of Ultrasound in Medicine and Biology: AFSUMB) の vice-president, また世界超音波医学会 (World Federation of Society of Ultrasound in Medicine and Biology: WFSUMB) の President-elect という大役を拝命しております。その関係で AFSUMB, 及び WFUMB の Board member, あるいは Council member でアクティブに活動されている世界のトップクラスの先生方をお招きして、基調講演をお願い致しました。具体的には AFSUMB からは Secretary の Prof. Seung Hyup Kim, Immediate-past President の Prof. Byung Ihn Choi (写真 3), President の Prof. Cheng-Wen Chiang (写真 16), そして Treasurer の Prof. Yi-Hong Chou を

お招きしました。さらに WFUMB からは現在の President である Prof. Michel Claudon (写真 17, 18), Secretary の Prof. David Evans, Treasurer の Prof. Beryl Benacerraf さらに American Institute of Ultrasound in Medicine (AIUM), WFUMB Councilor である Prof. Joshua Copel (写真 14 の中央), Immediate-past President の Prof. Cerri (写真 2) などをお迎えしました。それぞれの領域の専門の立場から素晴らしい講演を拝聴することができました。今後は、日本の国際化ということも課題の一つでありますのでこれをきっかけに来年以降もこのような海外の先生方を交えたセッションを企画して頂ければと考えております。

10. 終わりに

今回開催準備がやや出遅れ気味であった本学会も最後の数ヶ月で多くの医局員、及び実行委員の先生方、及び企業の皆様方の御協力を得て成功裏に終えることができました (写真 19)。これもひとえに会員の先生方のお陰と考えておりますので、今後とも宜しくご指導の程、お願い申し上げます。